

6-1					
主 題		経験と勘から根拠ある認知症ケアへ			
副 題		DEMBASE を活用した認知症ケアの標準化とケアの質向上への取り組み			
キーワード 1	DEMBASE	キーワード 2	認知症ケア	研究(実践)期間	12 ヶ月

法人名	社福) フレスコ会	事業所名	フレスコ浅草
発表者(職種)	助川絢南(介護職員)、篠崎結香(介護職員)		
共同研究(実践)者	浅香裕一(介護主任)、大熊末沙(介護課長)、前島 雅紀(介護課長)		

電 話	03-5824-0255	FAX	03-5824-0240
-----	--------------	-----	--------------

事業所紹介	フレスコ浅草は、台東区浅草に 2016 年 9 月に開設したユニットケア型の特別養護老人ホームになります。定員は特養 84 名、ショートステイ 11 名になります。「新しい介護の枠組みを医療のサポートで創造する」を理念に掲げ、医療と介護が密接に連携した安心できる生活環境を提供しています。
-------	--

《1. 研究(実践)前の状況と課題》

施設では認知症ケアを積極的に取り組んできたが、その多くは職員個人の経験や勘に依存しており、ケアの根拠や効果を客観的に示すことが困難であった。

そこで、日本版 BPSD ケアプログラムの ICT ツールである DEMBASE を活用し、科学的根拠に基づく認知症ケアの実践に取り組んだ。

《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》

従来、取り組んできた認知症ケアに、さらに DEMBASE を活用することにより認知症高齢者の行動や心理状態を客観的に把握し、根拠に基づく認知症ケアを実践することで、BPSD の改善と認知症ケアの質向上を図る。

《3. 具体的な取り組みの内容》

- ① 対象者：当施設では認知症高齢者の日常生活自立度Ⅲ以上の入居者が全体の 65%を占めている。その中でも BPSD の影響により日常生活に支障が見られ、改善効果の検証が可能と考えられた入居者 2 名をモデルケースとして選定した。
- ② 取り組みの具体的な手法：日本版 BPSD ケアプログラムの ICT ツールである DEMBASE を活用した。利用者の行動や心理状態を観察し、DEMBASE へ入力することで状態を可視化した。その結果をもとに多職種カンファレンスを実施し、BPSD の背景要因を分析したうえで個別ケアを立案・実践した。
- ③ 取り組み時間や期間：令和 7 年 4 月から令和 8 年 3 月までの 12 か月間実施した。
- ④ 取り組みの手順：1. 職員への研修実施 2. 対象者選定 3. DEMBASE によるアセスメント 4. 多職種会議による分析、ケア方針決定 5. ケア実践 6. 再評価 7. ケア内容の修正

- ⑤ 取り組んだ職員数や構成：対象となった 2 名の方が暮らすユニット職員と介護主任 1 名、看護職員 1 名、生活相談員 1 名、ケアマネジャー 1 名、介護課長 2 名が参加した。
- ⑥ 部署間の連携：介護職員が日常の観察を行い、看護職員が身体状況の評価を実施した。また、介護課長や生活相談員、ケアマネジャーを含めたカンファレンスを開催し、多角的な視点から BPSD の背景要因を検討した。
- ⑦ 使用した道具や費用：使用ツールは DEMBASE、日本版 BPSD ケアプログラム資料、介護記録システムである。費用は既存の環境を活用したため大きな設備投資は要しなかった。
- ⑧ 活動の成果を出すポイントになった点：従来は職員個々の経験や勘によって判断されていた認知症ケアを、DEMBASE を用いて客観的に可視化したことが成果につながった。また、多職種で分析結果を共有したことで、利用者の行動を「問題行動」として捉えるのではなく、「背景要因のある行動」として理解できるようになり、ケアの統一につながった。
- ⑨ 取り組みに対する施設のバックアップ体制：施設として認知症ケアの質の向上を重点課題とし、介護職員を中心に取り組みを推進した。また DEMBASE 活用のための研修参加支援やカンファレンス時間の確保を行い、現場職員が継続的に取り組める体制を整備した。

《4. 取り組みの結果》

DEMBASE を活用し、入居者の行動や心理状態を分析した結果、対象者 2 名に変化が見られた。事例①では、排泄介助拒否の背景要因を分析し、本人の思いや羞恥心に配慮したケアを実践したことで、拒否行動の減少が認められた。DEMBASE による評価は 16 点から 9 点へ改善した。事例②では、不安訴えの背景にある役割喪失感や生活歴に着目した支援を行ったことで、「どうしたらいいかわからない」といった訴えが減少し、落ち着いた生活を送る時間が増加した。また、DEMBASE を活用することで、利用者の状態変化を客観的に把握・共有できるようになり、経験や勘に頼るだけでなく、根拠に基づいた認知症ケアの実践につながった。

《5. 考察、まとめ》

従来の認知症ケアでは、職員個人の経験や勘に基づき対応が行われることが少なかった。DEMBASE を活用したことで、利用者の状態を客観的に把握し、その背景要因を多職種で共有しながらケアを検討することが可能となった。

その結果、認知症ケアの根拠が明確となり、職員の認知症理解の向上やケアの統一化につながったと考えられる。また、経験や勘に依存していた認知症ケアを、客観的なデータに基づき実践・評価する文化の醸成につながったと考えられる。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人(ご家族)に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

とうきょう認知症ナビ、日本版 B P S D ケアプログラム

《8. 提案と発信》

認知症ケアは職員個人の経験に依存しやすい分野であるが、ICT ツール等を活用して状態を可視化することで、根拠に基づくケアの実践が可能となる。

今後は対象者を拡大し、継続的な効果検証を行いながら、施設や法人全体で活用を進めるとともに、認知症ケアの標準化と職員育成にも活用していきたい。また、認知症ケアに悩む他施設に対しても、DEMBASE を活用した取り組みの有効性を発信していきたい。